

## “いも掘りランデブー”

この仕事を始めて、いつの間にか8年目に差し掛かっていた。これまで数えきれないほどの農作業現場を見てきたが、2台のトラクターが並んで畑を走る光景を目にしたのは初めてだった。そのランデブーにはどこか新鮮さと微笑ましさがあり、気づけばカメラを手に取りシャッターを切っていた。

福岡県糟屋郡篠栗町（かすやくんささぐりまち）。福岡市の中心部から東へ12キロに位置するこの町は、JR 篠栗駅を中心とした市街地と、その周辺に広がる住宅地、さらにその外縁を囲む広大な農地が特徴だ。博多駅から電車で20分足らずという利便性もあって住宅地の開発が進み、2005年に3万人を超えた人口は、その後も大きな減少を見せることなく2024年現在で3万1190人を数える。この安定した人口動態は、全国的に見ても稀有な状況だ。

一方、町の風景を彩る農地の現実も厳しい。主に米作りが中心であるこの地だが、農業に従事する人々の数は約150人。人口のわずか0.5%に過ぎない。高齢化の波はここにも押し寄せ、離農する人々が増えたことで耕作放棄地も増加の一途をたどっている。

そんな中、2022年にこの町で新規就農を果たしたのが今回の主人公である清原夫妻だ。2人は放棄されていた農地を借り受け、福岡では

珍しいさつまいも栽培に挑戦することを決めた。この日、5月に植え付けたさつまいもがいよいよ収穫の時を迎えていた。夫妻が手塩にかけて育てたさつまいもは、農薬や除草剤、化学肥料を一切使わない「自然派」のものだ。

畑の中を、2台のトラクターがまるで息を合わせるかのように進んでいく。先頭に行くのは妻・美予（みよ）さんの操るトラクター。歩くほどのゆったりとした速度で進みながら、つる草を丁寧に刈り取っていく。そのすぐ後ろを、夫の丈生（たけお）さんのトラクターが続き、土を掘り返してはさつまいもを掘り起こす。夫妻の絶妙な連携によって次々と顔を出すさつまいもたち。掘り返されたばかりの土の香りと、トラクターのエンジン音が、静かな農地を心地よいハーモニーで包み込んでいた。

掘り返された畑には、赤紫色の「紅はるか」がずらりと並ぶ。ふっくらと太り、艶やかに輝くその姿は、見る者に収穫の喜びを伝える。「紅はるか」は近年人気の品種で、特に焼きいもにしたときの甘さと蜜のとろけるような味わいが絶品だ。「焼きいもにすると蜜がたっぷり出て、本当に美味しいんですよ」と、美予さんは笑顔で語る。コンテナいっぱい詰まったさつまいもを抱えた彼女の表情には、手間と愛情をかけた収穫への満足感がにじんでいた。

## “さつまいもの伝来”

「さつまいも」という名から、その原産地を薩摩、つまり鹿児島と考える人は少なくないかもしれない。しかし、実際にはその説は誤りで、さつまいもの起源は中央アメリカのメキシコ周辺部にあるというのが有力な見解だ。驚くべきことに、この植物はすでに5000年以上も前から栽培されていたとされる。

15世紀末、あのクリストファー・コロンブスによってヨーロッパにもたらされたさつまいも。しかし亜熱帯に適應したこの植物は、冬の寒さが厳しいヨーロッパの気候になじまず定着することはなかった。その後、ポルトガルやスペインの大航海時代の冒険者たちによって、さつまいもはインドやフィリピンを経て、16世紀末には中国南部に伝わったとされている。

中国南部、特に現在の福建省福州市周辺は、さつまいも栽培に理想的な環境だっただけでなく、この植物が比較的やせた土地でも育つ生命力を持つこと、そして地中で成長する特性が評価された。そのためさつまいもは、「救荒作物」として急速に広まっていく。救荒作物とは、異常気象や災害、戦争といった危機的状況に備えて栽培される作物のことである。

ちなみに、さつまいもは中国では当時から「甘薯（かんしょ）」と呼ばれていた。「甘い薯（いも）」の意味の通り、甘みが特徴のこの作物は、飢饉の時代に多くの人々を救うことになる。

関ヶ原の戦いから5年後の1605年、日本にさつまいもが初めて伝来した。そのきっかけを作ったのは、琉球王国（現在の沖縄県）の役人、野國總管（のくにそうかん）という人物である。彼は交易のために訪れた中国・福州で、広大なさつまいも畑を目の当たりにした。その光景を見た瞬間、彼は確信する。台風被害に悩まされる故郷の琉球では、この作物が人々の飢えを救う救世主となるだろう、と。

しかし、当時の中国ではさつまいもを国外に持ち出すことは固く禁じられていた。だが、野國總管はその掟を破る覚悟を決める。未来の琉球のため、命の危険を顧みず密かに種いもを持ち帰るという大胆な行動に出たのだ。彼の決断と行動力のおかげで、さつまいもは琉球に根付き、広く栽培されるようになった。その功績を称え、彼の生誕地である嘉手納町では、現在でも毎年「野國總管祭り」が盛大に開催されている。

それから100年後の1705年、さつまいもはついに日本本土に到達する。鹿児島県開聞岳の麓、現在の指宿市山川町の漁師であった利右衛門は、船乗りとして琉球を訪れる。その地で目にしたのは、荒れた土地でも力強く育つさつまいもの姿だった。利右衛門は、この作物が故郷の開聞岳山麓にも適していると直感し、種いもを持ち帰ることを決意する。

さつまいもは、火山灰や軽石に覆われ、乾燥しやすく地力の乏しい開聞岳山麓の環境に驚くべき速さで適應した。そして台風にも強い特性か

ら、瞬く間に薩摩全土へと広がり、やがて地域の重要な作物として定着していった。

ちなみに、鹿児島では現在でもさつまいもを「からいも」と呼んでいる。この名称は「唐（から）から伝わったいも」という由来を持ち、異国からもたらされたこの作物の歴史を今に伝えている。「からいも」が薩摩に広まったことで、他の地域が大飢饉に見舞われた際は、薩摩の人々は飢えに苦しむことがほとんどなかったという。

## “日本を救うさつまいも”

江戸時代、日本列島は度重なる飢饉の脅威にさらされていた。そのひとつが1732年に発生した享保の大飢饉である。害虫の異常発生と冷夏が西日本一帯を凶作に追い込み、特に福岡を中心とした九州地方は壊滅的な被害を受けた。

この未曾有の危機に際し、徳川8代将軍・吉宗は薩摩藩からさつまいもを取り寄せるという大胆な策を講じ、蘭学者の青木昆陽に江戸での栽培を命じた。

昆陽は江戸・小石川の幕府御薬園（現在の小石川植物園）などで試験栽培に取り組み、その努力の末、1735年11月に見事収穫に成功。およそ4400個のさつまいもが実ったという。

この成果により、さつまいもとその栽培方法は瞬く間に全国各地へと広がった。やせた土地でも育つ生命力と耐久性から、さつまいもは救荒作物として重宝され、飢饉対策の切り札となった。こうした功績から、青木昆陽は後に「甘

薯先生」としてその名を歴史に刻むことになる。ちなみに、「さつまいも」という名称の由来は「薩摩から伝わったいも」にあるとされ、この呼び名を広めたのも昆陽だったという説が有力だ。その後もさつまいもは、幾度となく人々を飢えから救ってきた。江戸時代の飢饉を経て、太平洋戦争中から戦後にかけての混乱期にもその価値が再認識された。コメの生産が追いつかない中、政府はさつまいもの増産を奨励。その結果、生産量は300万トン台からわずか数年で600万トン台にまで倍増し、多くの命を支えた。

そして迎えた令和の時代。日本政府は、不測の事態に備えた食料確保計画を策定している。カロリーベースで38%という日本の食料自給率は、先進諸国の中で最低水準だ。異常気象や国際情勢の悪化による輸入途絶に備え、自給自足の体制をどう整えるかが喫緊の課題となっている。その中で再び脚光を浴びているのが、さつまいもである。

計画では、必要なカロリーの4分の3をさつまいもで補うという驚くべき提案がなされている。これを実現するための法制化が進められており、もし実行されれば、都市部の公園や校庭でさつまいもを栽培する光景が日常となるかもしれない。

もはやさつまいもは、単なる嗜好品ではなく、未来の主食としての可能性を秘めた作物だ。我々はこの現実を真摯に受け止め、新たな食の時代に向き合う覚悟を持つべきなのかもしれない。

# 大地が紡ぐ甘み、心と體に染みる贈り物



## 特集

### さつまいも

篠栗町  
清原丈生  
清原美予  
文：梶原圭三  
写真：川上和禎